



日本ボーイスカウト神奈川連盟 川崎スカウトクラブ

巻頭言

[気候変動対策変革の時]

会長 谷本 通安

環境意識を飛躍的に高めた1977年の京都会議（地球温暖化防止国際会議 COP3）今では「環境という言葉を見聞きしない日はない」程で、その傾向は益々強まり21世紀は環境の世紀、環境問題が重大な社会問題になる時代であり、国際交渉の最も重要な焦点で関心は社会に完全に定着しているが、地球温暖化の事態は年々悪化一途を辿っている感は否めない。COP26で世界の気温上昇を産業革命前と比べ



1.5℃に抑える努力を追求する「グラスゴー合意」が採択され、パリ協定時から一歩踏み込んだ意義は大きいですが、注目された石炭火力廃止は先進国側と新興国側の激しい応酬で対立が顕在化し道筋すら見えない状況で一刻の猶予も許されない筈であるが。各国は2030年温室効果ガスの削減目標を前倒しし、2013年度比46%減とする日本、しかし現状の取り組みでは2030年世界の排出量は13.7%増加、今世紀末の気温は2.4℃上

昇予測が出た。各国事情を考えると絶望的ですからある。それは各国が互いに排出枠を被せあう敵対的な交渉形式が相互不信を生じている為だ。先ず枠を被せる考え方を根本的に改める必要性があり国際協調できること、できないことを明確に区別し各国が国益に沿った形で実効性のある取組を実施していくことが肝要である。地球温暖化は（人間の所為で疑う余地はない）舵取りを間違えると自然災害や生態系への悪影響が懸念される深刻な問題であり、防止政策として①抽象的な机上の空論でなく必ず現実の事例に基づくこと。②基本的な概念枠組みを自国で出すこと。今、最も必要なことは世界規模で問題を解決する為に現実を直視し理念を共有して行動を起こすと。多くの国では、気候変動の被害を小さくし未来への責任を果たすことを目標として、バックキャストで目標や政策を決めるというパラダイムシフト（劇的な変化）が起こっているが我が国では政府も産業界もまだ将来像が描けていない。これでは深刻化する気候危機に対応できず先進国から脱落し、評価や競争力を失うことになるので「未来の姿」を政策として描き出し、世界が強調する契機に（やれることをやる、道は一つではない）。人間は自然の「支配者」ではなく「一員」であり、「地球公共財」と位置づけ人間と自然との相利共生関係を構築する必要がある。自然は先祖からの遺産でなく子孫からの預かりものであることを肝に銘じ、未来の為守るのは我々しかない。



正義だけでは地球は救えない。

「子どもの権利条約フォーラム

2021 in かわさき」への奉仕

小川 芳郎

11月6日土曜会場：川崎市男女共同参画センタースクラム21（高津区溝口）12:30～17:00、7日日曜会場市立下作延小学校（高津区下作延）8:30～16:45の両日に2会場の設営・撤去、受付に5名の奉仕参加をしました。このフォーラムは大会スローガンに「手を取り合って、にじいろの未来へ笑顔で歩もう！」



を掲げ、ハイブリット開催で会場での参加とオンライン参加によって22の分科会で討論が行われていました。

子どもの権利条約が国連で採択されたのは1989年。日本が批准したのは1994年でした。川崎市では、日本国内で初めてこども権利の総合条例として、「川崎市子どもの権利条例」として2001年に施行、2021年の今年、条例制定20年を迎えました。子どもの権利フォーラムは、子どもの権利条約の普及と、子どもの権利について関心を寄せる人々の意見交換、出会い、交流の場として始まりました。1993年から子どもの権利条約採択記念日（11月20日）前後に、全国各地でこれまで延べ28回開催されてきています。この20年で子どもを取り巻く環境が、どのように変わってきたのかを検証するとともに、川崎市で創られた子どもの権利条例の理念や仕組みを共有し、子どもたちの「遊ぶこと、学ぶこと、生きること、守り・守られること、参加すること」の大切さや子どもと大人が共に「自分らしく幸せに生きる」ことについて考えあう機会として、2021年、子どもの権利条約フォーラムの川崎市での開催がなされました。7日15時45分から下作延小学校体育館で行われたクロージングでは、約150人の子供と大人が集い、分科会での発表がありました。

スカウトクラブの奉仕者も後席で聞くことができました。クロージングの概略は、

1. 子どもだって言いたいことある！言っていないんだ。「なんでやねん！すごろく」は、すごろくという遊びを通して、子どもの権利条約を知る機会を実践したという結果が発表された。
2. 川崎市子どもの権利条例の制定から、条例の具現化を目指しできた公設民営の「フリースペースえん」の説明が参加者になされたこと。学校外の多様な学びと育ちの場であるこの場所で学校に行っている子もいない子も混ざり合って、子どもだけで作りあう商店街。大人は口出し・手出し無用。店構えや売りものなどすべて子どもの手で作られた子どもの“やってみよう”がつまったイベント「こどもゆめ横丁」に参加した感想が述べられた。
3. 最後に参加者代表の高学年と低学年の少女2人が、今回掲げたこのスローガンをどうやって実現するのか、どうやったらこのフォーラムのことを忘れないようにいられるか、どうしたらもっと子どもの権利を広めていくかということについて、参加したみなさんと話し合いました。フォーラムからさらに何かを始めたいという思いを共有しましたと力強く、はきはきと発表され、会場の共感を得て終わりました。来年は沖縄開催ということでした。



2日目 フィナーレ



私の宝物

初めての企画でしたが、今号はテーマを決め皆さんから投稿していただきました。さまざまなドラマがありユニークな内容になりました。(編集子)

私の宝物＝スカウティングを通じて

稲葉 正明

スカウティングを通じて手に入れたいろいろなアイテムがある。ユニフォームを着て、初めて参加記念ワッペンを胸につけてたのは 1963 年（昭和 38 年）、丹沢玄倉で開催された川崎地区野営だった。ワッペンにはイノシシが刺繍されている。未だカブスカウト（うさぎ）だったがテントに泊まった。その後、数多くの行事に参加し、メダル、ネッカチーフなどの記念アイテムが箱に入っている。ほとんどのアイテムには行事の開催年が記されているが、開催日まで分かるものは少ない。デザイン上の制約があるのかも知れない。ところが、開催日の分るアイテムも箱の中に入っているのは貴重な経験を思い出させてくれる宝物である。

この宝物は川崎地区からいただいた盾（写真左）である。スカウト章は輝きを失っていない。



そして、盾の銘板（写真右に拡大）には川崎地区 20 周年記念、1970 年 10 月 9 - 10 日と記されている。日付が 2 日間になっているのは、記念行事の一つとして行われたオーバーナイトハイクの参加スカウト用に作成されたからである。このプログラムでは、ポイントを通過するスカウトの課題達成度により順位が決められた。私は第 3 位でこの盾をいただいた。順位はともかく、このオーバーナイトハイクでは忘れられない、貴重な経験をしている。

集合、出発は南武線の武蔵中原駅で、指定されたポイントを巡りながら課題を消化していった。

仮泊地は川崎市立青少年の家（宮前区宮崎）で、指定されたエリアの中でビバークすることになっていた。私が設営を開始した時には誰もいなかった。ボーイ時代からオーバーナイトハイクは苦手だったが、仮泊地には先頭で到着していた。

先頭での到着は嬉しかったが、到着前のポイントが鬼門だった。青少年の家の門に入る直前、遠目を凝らすと、門に沿った左側の道路前方にリーダーが立っている。そして、こちらが立ち止まった瞬間、単旗が振られ、モールス信号が始まった。ポイントの課題が送られているのだが、うーん、全く分からない。菊スカウトなのにモールス信号が解読できないのはまずいのだが、いきなりレベルは上がらず、あきらめた。それまでのポイントを無事通過してきたのに残念だった。

モールス信号の送信者は川崎 21 団の佐久間宣吉さんだった。私の年代のシニアスカウトは地区のローバーにあこがれていた。佐久間さんは富士スカウトに進級後、このオーバーナイトハイクにローバースカウトとして奉仕されていた。佐久間さんや先輩ローバーがシニアスカウトために練っていただいた課題を受信できなかったことがとても残念だった。

信号は符号ではないのだから、「信」の文字に表される大切なことをしっかりと受け止めよ、と教わったように思う。同じような気持ちにはこれまでに何回もなったが、なかなか直らない。ビバークを設営した時には少し落ち込んでいたが、すぐに仮眠できた。

オーバーナイトハイク中、いつ、どこで食事を取ったのか、20 周年記念の会場までどのように移動したのかは思いだせない。しかし、記念式典で参加記念の盾を授与されたときに、地区コミッショナーから「頑張ったな！」と声をかけていただいたこと、そして、26 団（自団）のスカウトやリーダーがひととき大きな拍手をしてくれたことはよく覚えている。

そ(---) な(---) え(---) よ(---)

つ(---) ね(---) に(---)

冊子 [ありがとう 川崎球場]

高安 征夫

「私の宝物」と言われて頭に浮かぶのは、2001年(H13)に川崎市環境局が発刊した [ありがとう 川崎球場] という川崎球場史を記録した冊子です。

そもそも私の人生の中でプロ野球との出会いは、小学校の高学年になったころ駄菓子屋で売っていた“紅梅キャラメル”(10粒入り10円)の中に入っていたプロ野球「巨人軍選手のカード」を集めること、これが出会いでした。集めたカードの得点により、当時ではなかなか手に入らなかった“グローブ”“バット”等の景品が貰える、とのことで男の子間では一大ブームでした。小遣いもろくにもらえなかった私には高得点の景品には手が届かず“バット型のペンシル”位がせいぜいでした。

従ってプロ野球と言っても所詮「カード」の世界でした。そんなプロ野球球団が川崎に誕生、1954年(S29)私が中学1年になった年でした。

1953年(S28)日本のプロ野球は数年の変革を経て、セ・リーグ6球団、パ・リーグ7球団という変則的なリーグ構成でした。この年パ・リーグ総裁に就任した「永田雅一大映スターズオーナー」

(大映映画社長)の発案で「人気のセ・リーグに対抗するため起死回生の策として、パ・リーグを8球団にする」するでした。紆余曲折の末、永田は大日本麦酒の社長を経験し戦後は参議院議員として通産大臣を歴任した“日本のビール王”こと「高橋龍太郎」氏に白羽の矢を立て「球界発展のために」を口実に口説き落としました。既に78歳の高齢で隠居状態にあった「高橋龍太郎」氏だが「球界のためなら」と第8球団の支援を決意。球団名はかつてのビールの商品名“ユニオンビール”からとり「高橋ユニオンズ」として誕生。本拠地を川崎に置き、出来たばかりの川崎球場で発足。パ・リーグ他球団不要選手の寄せ集め集団で、これというスター選手もいない、そして弱いではお客もまばら、それでも何故か試合日には足繁く通り黄色い声援を送ったことが昨日のように思い出されます。改革の名の下に、僅か3年という短命球団でしたが、

そんな中でも日本プロ野球史上唯一個人経営で私財を投じた「高橋竜太郎」氏にとって球団はわが子のようなものだったのでしょう。明るい話題としては3年目に六大学野球のスター、慶応の「佐々木信也」選手が入団。球団の看板スターとして注目されて新人王候補に名を連ねる活躍でした。

後に「ミスタープロ野球ニュース」とまで言われ、フジテレビ系の“スポーツキャスター”として全国に知れ渡る人気タレントになりました。その後、球団の運命は改革の名の下に1957年(S32)には「大映」と合併、1958年(S33)はその「大映」が「毎日」と合併して「大毎オリオンズ」(現千葉ロッテマリーンズ)が誕生。必然的に「高橋ユニオンズ」の流れをくむ「大毎オリオンズ」に愛着が移り、その後に経営母体が変わろうとも、本拠地が東京から仙台に変わって、ジプシー球団と揶揄された時期もありましたが、1977年(S52)本拠地を川崎に移転のニュースには歓喜の声を出しました。1月の自主トレから公式戦と川崎球場に通いました。1991年(H3)の本拠地を千葉に移転には驚きとショックでした。一時はファンをやめようかと悩みましたが、断ち切ることは出来ずより一層の球団愛が芽生え、応援を続けて67年、ファンクラブ“TEAM26”に入会して15年、今ではテレビ観戦が主ですが私の影響か幸い息子夫婦もファンの為、年に1~2回一緒にZOZOマリン球場に応援に行きます。2001年(H13)6月19日「東京新聞・川崎版」朝刊に「川崎球場史」冊子「ありがとう川崎球場」



発刊情報の記事を見て早速市役所に問い合わせるも「今回は市の資料として作成したもので一般に配布していません。閲覧は市の図書館で見てください」とのことです。図書館に

見に行きました。懐かしい「高橋ユニオンズ」の選手名を見ていると居ても立ってもいられなくなり「どうしても欲しい」の気持ちの高まりを抑えられず、当時の「高橋清市長」に球場建設時からプロ野球への思い出を込めて直訴の手紙を届けました。2週間後「高安様の思い出の深さに答えて、今回に限っての措置」ということで送って頂き、手にすることが出来ました。私の終生の宝物になりました。奇縁もありました。2011年(H23)10月18日ガソリンスタンドに給油に行った時、偶然見たスポーツ紙の雑誌広告欄に「最弱球団高橋ユニオンズ青春記」を見つけ知り合いの本屋に取り寄せを依頼。内容は当時の選手達の54年後の同窓会的な集まりの会から始まり、3年間の記録や当事者間でのみ分かりえぬ実情が記された内容に、今更ながら高橋オーナーはじめ選手や関係者は大変な3年間だったんだなー。晩年、高橋龍太郎氏は「俺は永田に騙された」とつぶやくことがあったそうです。こんなことを知った事により一層愛おしさが募る思いです。そんな私の人生を振り返ることの出来る冊子「ありがとう 川崎球場」は「私の宝物」です。今回この様な思い出を振り返る機会を与えて下さったスカウトクラブに感謝とお礼を申し上げます。

【サッカーワールドカップ観戦記】

百木 幹雄

今年ワールドカップイヤー、カタール大会が開催されます。日本も必ずや出場してくれると信じています。さて、2002年(H14)6月日韓 W-Cop が横浜国際サッカー場を中心に各地で行われました。私は日本 VS ロシア、埼玉の準決勝、そして横浜での決勝、ブラジル VS ドイツを観戦しました。

1998年(H10)フランス大会初出場のチケットが取れずハッピーとフラッグはそのままに。

2002年大会のチケットは6ヶ月前、組み合わせも未決定。3試合で軽四輪自動車の新車が買える程のものでした。会社を休み午前8時にかけて電話がヒット！すごい興奮を憶えています。

決勝は6月30日、新横浜駅に降りた時、国際競

技場まで繋がった光景には圧倒されました。



座席はバックスタンド下段、日頃テレビしか見られないワールドクラスの激突は、ブラジル VS ドイツの夢のカード。サンバのリズムと共に観戦する世界の7万人が熱狂、私の両隣（鹿児島と仙台の人）も大声援。目の前をドリブルで進むRカルロスの芝生のこすれる音、カフー、得点王ロナルド、そしてドイツのクローゼ、GKカーンなど夢の試合は本当に凄く幸運なひとときでした。



ブラジル優勝の瞬間 BGMと共に無数の折鶴（小学生と横浜市民のセンスある作成）

が横浜の夜空に舞い、ペレをはじめ選手、スタッフが輪になって歓喜する光景は一生のハイライトとして残っています。

PROUD OF BLVE、JAPAN に栄光あれ！



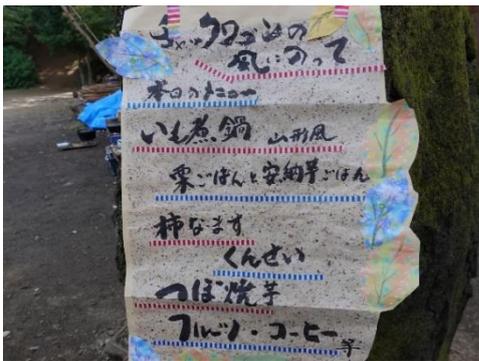
活動報告

昨年春以来続いた“新型コロナ騒動”で行事部、奉仕部が企画していた活動は日本連盟・神奈川連盟から活動自粛の通達があり、全て取り止めになりました。感染者減少により10月から活動が再開されましたので早速、一気に展開できました。

[チャックワゴンの風について] IX・収穫祭

恒例の収穫祭が、11月1日川崎市黒川野外活動センターで開催されました。天気も良く野外炊事にうって付けて、参加者13名がそれぞれ得意料理を手分けして準備に掛かりましたが、今年一番の料理は“いも煮・山形風”でした。小川さんが探して銀座一丁目の「山形県アンテナショップ」から仕入れてきた本格的なものでした。里芋、牛肉細切れ（これが味の決め手）コンニャク、キノコ等がセットになっていて、これを人数分購入しました。

昨年好評だった燻製は佐藤さんがシシャモ、ゆで卵等を準備して作って呉れました。谷本会長は毎年新しい料理に挑戦して、今年は地元の柿を使った“柿なます”でした。荻原さんは当初安納芋ご飯を作る予定が“栗ご飯”があるため“安納芋の焼き芋”になりましたが甘くておいしい物でした。



- ・いも煮 小川&その他大勢 ・栗ご飯 百木 & 百木夫人 ・柿なます、谷本、境 ・燻製、佐藤、高安 ・焼き芋 荻原、渡部
- ・かまど、火当番 大谷、市野

出来上がった料理は野外活動センター所員に出前をしてから、ゆっくり食事を堪能しました。



食事後、活動センター所員（年配者）が「高齢者が集まって野外料理をこんなに楽しんでいるのは皆さんいい歳の取り方をされていて羨ましい」と感想を漏らしていました。後片付けでは若い女性所員の厳しいチェックにより借用道具の“洗い直し”がありましたが、楽しい収穫祭でした。（渡部）

親睦旅行

11月18日～19日1泊2日親睦旅行が実施されました。例年通り、百木夫人にお世話になり箱根町大平台の私学共済施設[対岳荘]に宿泊して、昨年と違った箱根を楽しみました。

18日12:30 JR小田原駅集合後“小田原城見学組”、新施設“ミナカ小田原”見学組に分かれて行動することになりました。“ミナカ小田原”は1年前にオープンしたばかりで、食べ物店、お土産店、ホテル、展望足湯、図書館、子育て支援センターがあり「未来の宿場町」を目指したとの狙い通りで1年経った今も観光客、地元の買い物客で賑わっている場所です。一方、小田原城見学組は階段を使って天守閣最上階まで上りましたが秦野市から社会見学にきた小学生と一緒に大混雑でした。小田原城は15世紀中頃に造られたのではと考えられていて、1703年の元禄地震で倒壊焼失して、再建されましたが明治3年廃城になり全て壊されてしまいました。現在の天守閣は昭和35年復興して現在に至っています。

宿泊した「対岳荘」は料理も豪華でしたが温泉が良くて大満足でした。翌日の「鈴廣で蒲鉾作り」が午後からだった為に午前中は、箱根伝統の寄木細工工房「本間木工所」を見学に行きました。

寄木美術館や体験教室がありました。時間の制約もあり、希望者のみ美術館を見学しました。



「鈴廣」でおでんの昼食を食べて「ちくわ・蒲鉾作り」体験です。子供対象のものと思っていましたが、平日のためか高齢者も多く安心して体験ができました。見ていると簡単そうでしたが実際にやってみると中々どうして難しいものでした。



“恰好は病院スタッフのようですが・・・”

出来上がった物は材料が良かった為か美味しく食べられ家でも好評でした。天候にも恵まれて少し早い紅葉も見られて、時間にも余裕があり楽しい旅行でした。午後3時30分小田原駅で解散して家路につきました。

「百木さんご夫妻、有難うございました。」

(渡部)

【津久井道を歩く】第4回

昨年8月からスタートした「津久井道を歩く」ハイキングは、新型コロナウイルス感染防止のため計通り進められず時間がかかりましたが、第4回で津久井湖に到着する最終回を迎えました。

担当の小川さんは、毎回下見を重ねて周到な計画を作成していただき有難うございました。

そのためスムーズに展開出来ました。

12月7日(火) JR [橋本駅] 10時集合、参加者7名、[橋本駅] 北口からバスに乗り、「城山高校前」下車。津久井湖記念館(定休日で見学出来ず)津久井湖観光センター、予定していた「城山城址」は前日の雨で道が滑り易いため断念して、湖畔の遊歩道を散策してきました。(渡部)



【津久井道を歩こう】を終わって

小川 芳郎

今回の「津久井道を歩こう」を振り返ってみると①第3回小山内裏公園にある「鮎のみち(津久井往還)」の由来になった「昔、津久井で獲れた鮎を江戸の町まで売りに行くのに通っていた」こと、御菜鮎は、夜通し村継ぎで江戸城の御台所まで運ばれ、五月から九月にかけて二十回ほど届けられていた。大岡越前守忠相の配下であった蓑笠之助正高の日記に「津久井の鮎の鮎」と書き残されており、鮎が津久井の名産であったことが伺えるのである。鮎の獲れた河川は、相模川、道志川、神ノ川、早戸川、水沢川、串川、尻久保川であろう。

昔、鮎が沢山獲れたことが伺えることが現代で起きた。2018年に入ってから、例年に見られない

異変が全国で起きた。神奈川では県内を流れる相模川を遡上する鮎が大量発生した。神奈川県内水面漁業振興会の担当者によれば「4月1日から6月27日までに確認された鮎は4,600万尾を超えました。1999年から2017年までの平均は400万～500万尾です」と。なお、城山ダムから下流約2kmに創業大正3年の「桂川亭」があり、鮎料理を売り物にしている。店の歴史には城山ダム（津久井湖）が昭和40年に完成するまで、帆掛け舟、屋形船、渡し舟、鵜飼いなども行われていたと書かれている。

②津久井湖の成立

相模川には既に相模ダム（相模湖）が昭和22年に建設されていたが、横浜市をはじめ神奈川県内の人口急増に伴い、新たな水源確保が重要となった。そこで神奈川県は相模川に新たな城山ダムを建設して水需要に対応しようとし、昭和40年に完成した。城山ダムによって形成されるダム湖は「津久井湖と命名された。

今回は行けなかった「津久井城」は別名筑井城。「城山」という山そのものを改造した“山城”で鎌倉時代に築城されて、豊臣秀吉の小田原攻めの際の天正18年（1590）落城した。遺構として、土塁、堀切、郭、土橋、虎口、石垣、石列、がある。



津久井城俯瞰図（作図：守屋浩之氏）

◎情報提供

四ツ田緑地について

川崎市麻生区王禅寺地内に、約10年前まで（株）日立製作所が原子力研究所や保養地として使用していた約7.1haの土地があります。川崎市が購入

して特別緑地として活用する計画です。広大な敷地ですが長い間放置されていたため、荒地になっていますがBS活動に活用できる可能性もあるため、近隣団の第43団、49団、54団が奉仕で草刈り、竹林整備などを行っています。川崎地区も他団に奉仕を呼びかけ整備を進めています。今年度（令和4年）3月頃まで方向付されると思います。専用とイカないとはいませんがBSが利用できる緑地が得られれば野外活動に弾みが出ます。

会員募集

当クラブは昨年発会12周年を迎えました。活動目的として「より幸福な生涯を究めて会員同士の体験学習から楽しさを味わい、成果を生かすため、地域社会・スカウト運動に参画する」ことを目指しています。

奉仕活動、ハイキング、ディキャンプ、親睦旅行などを通して、楽しみながら活動しています。どなたでもご参加いただけます。

お問い合わせは下記へご連絡ください。

連絡先

事務局 わたなべ いさお 渡部 公

電話 045-973-8580

E-mail: ciao.14125@kce.biglobe.ne.jp

編集後記

- ・今号も皆様から投稿していただき編集ができました。ご協力に感謝いたします。テーマを決めて原稿をお願いしたのは初めてでしたが、多様な経験を持っている方から投稿いただき、次回は何かしようか考えなければと思っています。
- ・コロナ騒動が収まったと思いきや、新たなコロナウィルスが発生してきました。ワクチン接種の3回目が待たれますが、十分ご注意ください。
- ・表紙写真は、秦野市「弘法山公園」で撮影しました。例年より富士山の積雪が早い感じです。

（渡部）